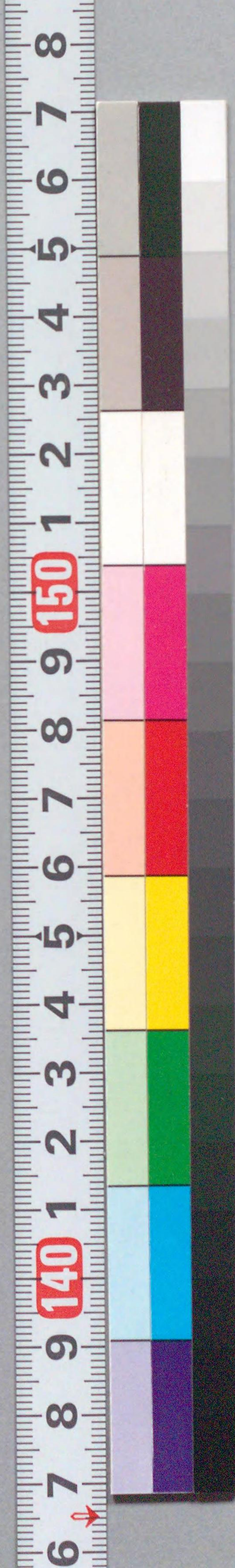




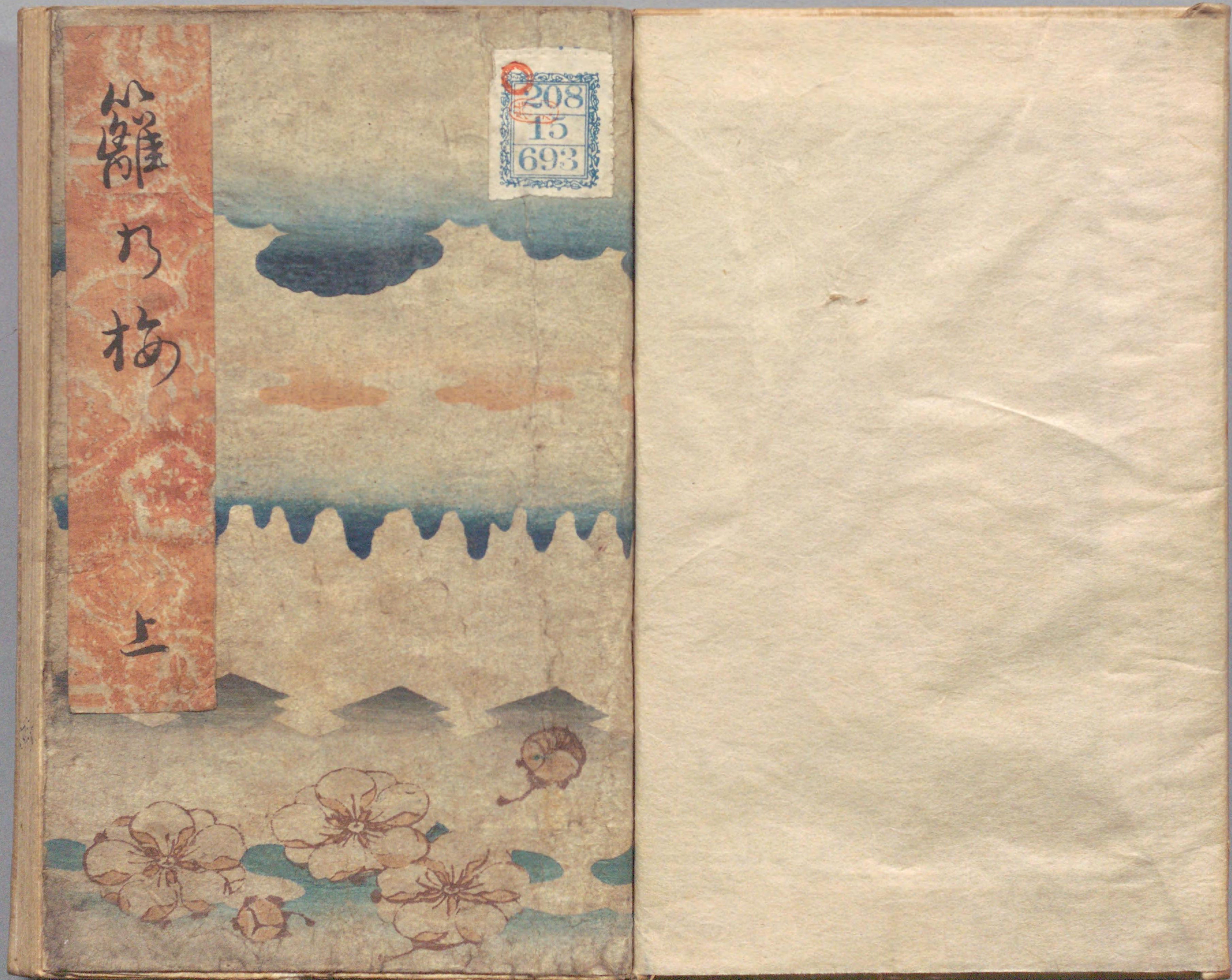
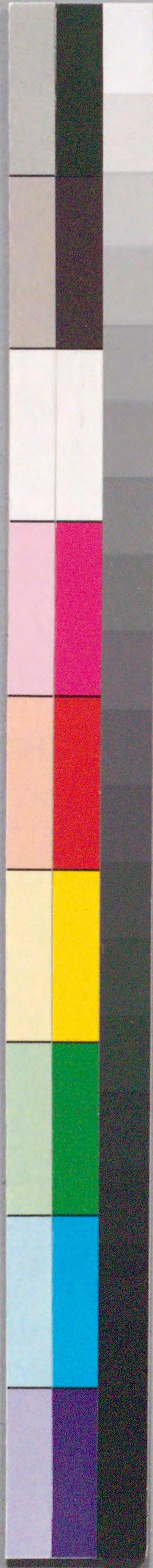
208
15
693

春色籬の梅
一



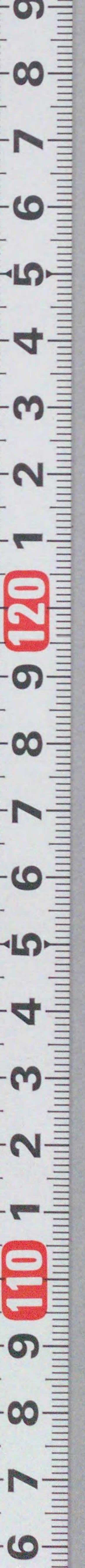
国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693

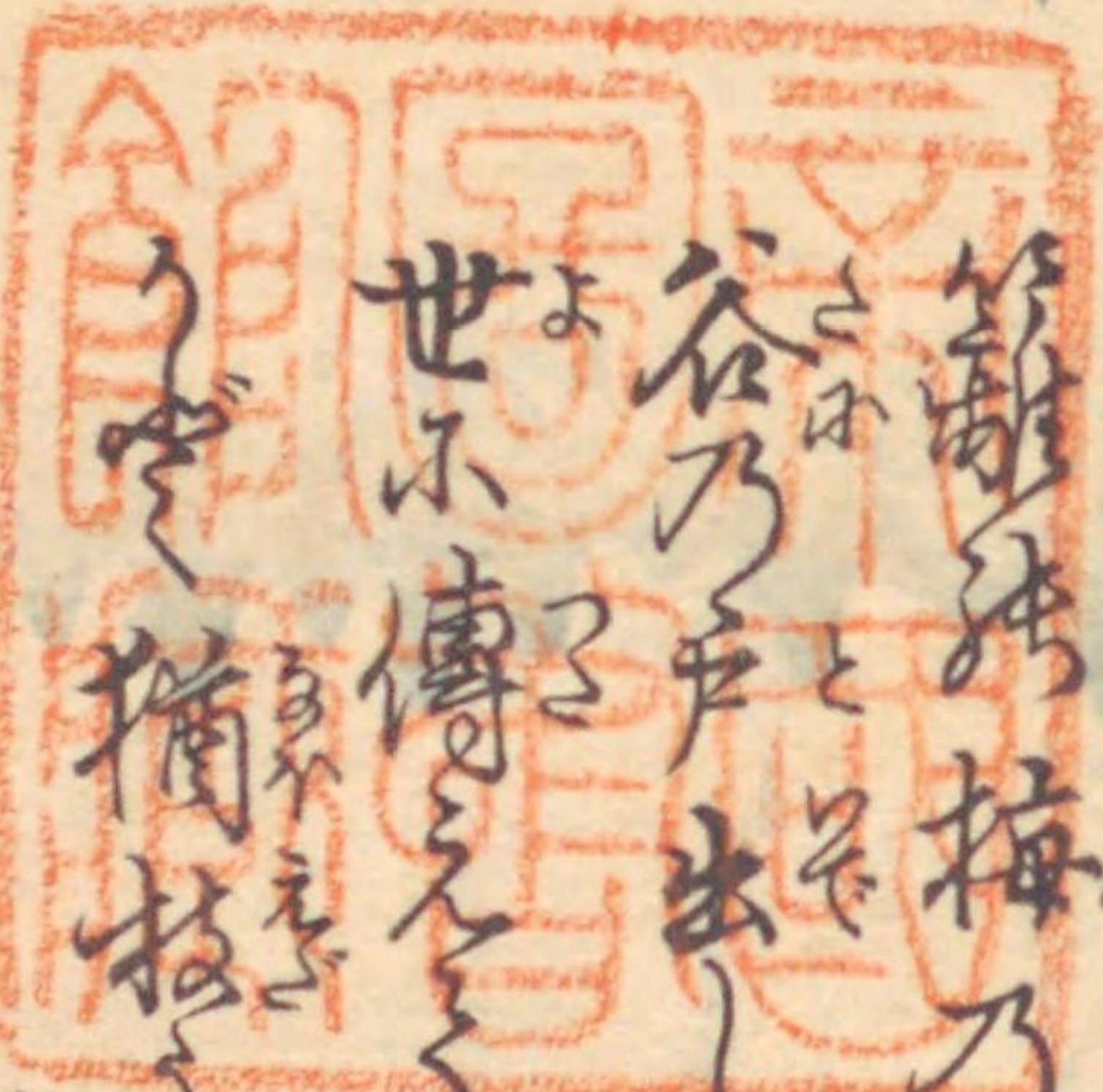
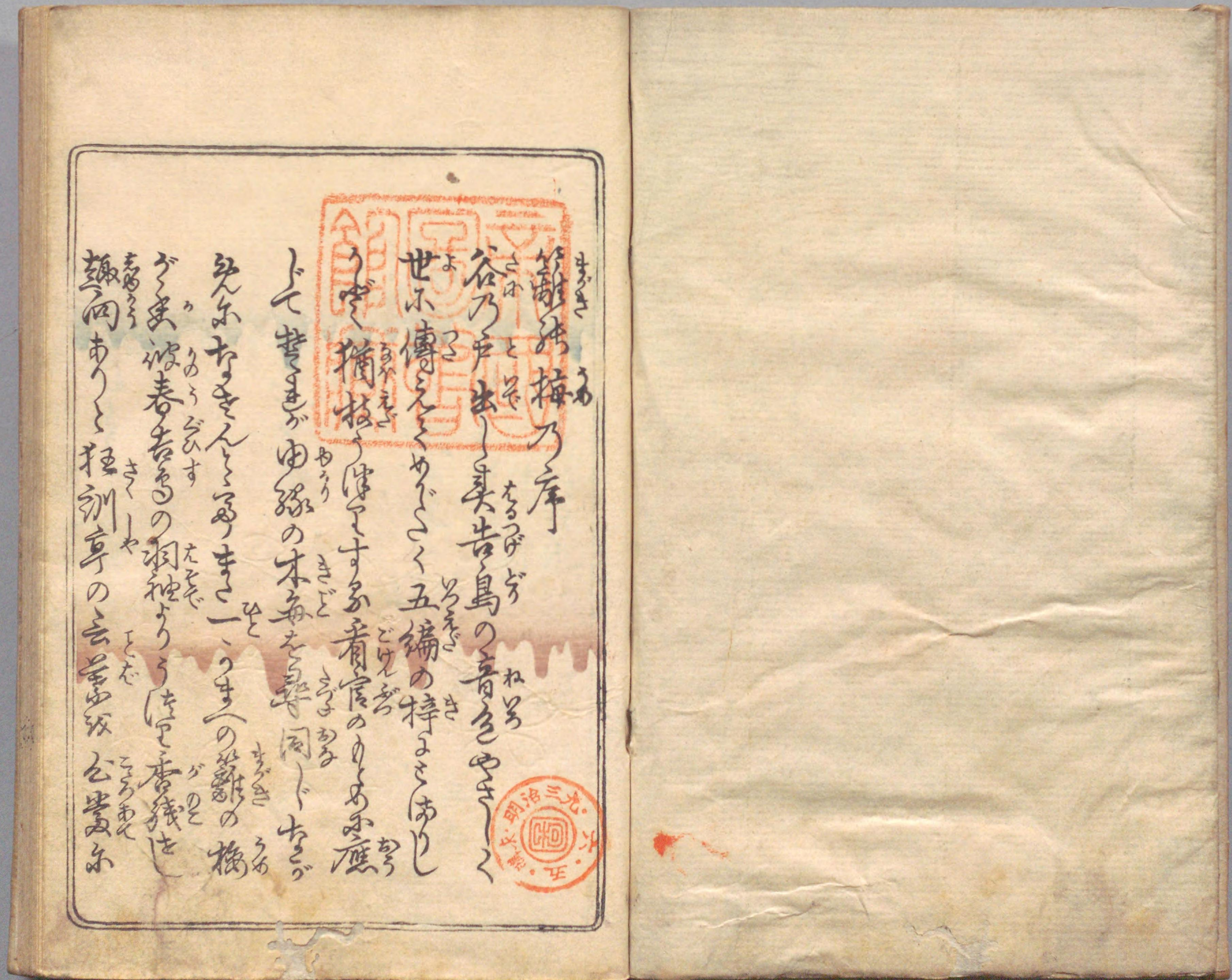
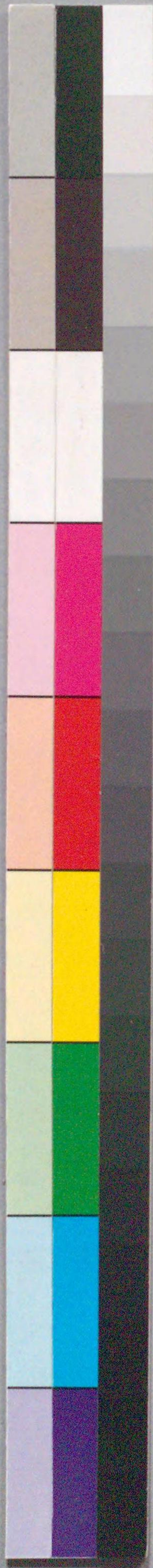
ガラス使用



国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693

ガラス使用





春色籬之梅乃序
 谷乃戸出 其昔鳥の音をやきく
 世不傳えりやかく五編の持よありし
 梅枝は けりす家音官のりある應
 上七 昔まがゆ縁の木をを同トやまが
 免尔やきんをりまて一つまの籬の梅
 がま 波春若もの羽袖よりうはて香残は
 趣向ありと 狂訓亭の云々 叢書 文叢 免



再度ふたたび梅うめのその枝えだのりえみゆ

高たか松まつと願ねがふふまま

歌うたえ書かき舟ふね 文ぶん漢かん堂どう主人しゅじん誌し

梅うめ花はなもも又またもも竹たけのその皮かわ色いろ
香かもも津つももままでで送おくるる本ほん下した川がわ
常とこ緑ろくもも津つがが果は熟じやく扱ありり結むす

三馬
八橋舎

梅うめ花はなのその皮かわ色いろ

梅うめ花はなのその皮かわ色いろ
香かもも津つももままでで送おくるる本ほん下した川がわ
常とこ緑ろくもも津つがが果は熟じやく扱ありり結むす
吾われ妻つま也なり之の競あそぶぶ常とこのその歌うたもももも
今いま鳥とりのその羽はねのその裏うらももかかららもも
新あらた結むす末すえのその下したももかかららもも

金雅
梅うめ花はな
松亭



天保九戌 成春發行

干時大保八丁酉九月

金龍山人狂刺亭

為永春水馬

三

書林の文章と諸君子の逸を假
用しきけりきぬか申候

まはる







マカキウロ五

春色籬の梅卷之壹

江戸

為永春水著

もろ 古物小残り一徳

第一回

公の老のりおるお庭てめでた中より猪のきふもどるくは
 湯川橋よりお庭をたぬる物もなき笑顔で大衆の
 名三橋と花揚おふてく麻まこのかげろかまど死竹史徳
 吸月相まのちとくまと岩井でまこと大和や小女
 是と住ま人のわごいお庭を風情して黄衣下屋の竹えもちり



又お花の極をいって述出— 若くは或さんお止ヨ私を
 毛づく— ちもぐ— 毛のの極は極のう極をいって長何ぞ
 他のも極めを長と往わ人私に毎をち推極ふことぐ
 らして困るう何極ぞを計りの極をいって長何ぞいす
 先途へ述出ま 毎て戸喚程どのすお出さん
 早く捕まへてむぶの貝よ合してち上ヨトのふお出さん
 出— お花の捕へんと述するも米をま新考お能ハ等がう
 考ふひめ実なるが死太家の 清代めけま— 樂— 女

連々も口端でも途中の怪あるま花の族我まのぞ
 友人はま極めて極して日世ふ名もた及本米をま
 探り新考あるが母形方の相子とあり及申るまが新
 こころ面白うぬ風ありあふうも米をま新考お出
 極め面白くもあは人ありとあはるるが及出されて速
 考るるべ— と想ある批判は似るまも由彰簡るれはとく
 考あめてあうま極めあうてお客の及及おと考の
 必体とらちるるの初うう映を滑替するまが極



ぐ
 人といふはあんな母老の人と違ふ所の十六七の衆の如
 て
 もふありたよふもさういふ老妻よははらう
 車
 捲ぶる風情さうく容あつたあわさるさうさう女
 連のめい裁るあつた他はさういふとさう人の衆さう大
 違へりまじり人情気さういふさういふさう一條の
 中さう
 抱きさう極さういふさういふさういふさういふ
 さんゆさう日の善さういふおび教むさうさうさう神さう川の歌さう
 いふさう
 いらさうとさうとねはさういふ宿りさういふさういふさういふさういふ

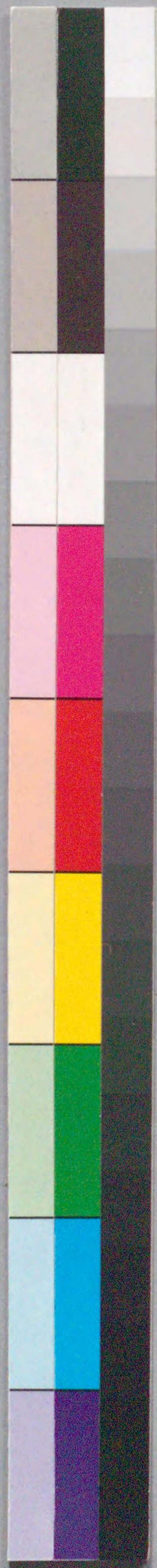
第二回

むう大職符徳豆さ麻傳系糸指の途中相換の由由井
 の里に宿さういふ子さ夜さ重さ成さ感さういふ事さ事所おせさういふ
 徳伝今の大事の化おささういふ埋めさういふより徳伝今さういふ
 名も登りさういふとさういふ谷七郷さういふ
 小坂郷 小林郷 葉山郷 津村郷
 村尾郷 長尾郷 文部郷
 大務が谷梅が谷月が谷岩さういふとさういふとさういふとさういふとさういふ

く ちまうか ちまうか
あふちと推へ公南りのあつち小川の署徳念の見物も
のたけまかひらぎ 神楽川よきり 菖蒲の寄りゆりくとして
身一ゆの松が星の尻身成身終そまより 徳念道以後と
とていひのたけふ糸 情とどげい所ふ二三日運致して今日
岩窟の天女成澤れりなり 海歩破ふ之是びちりふ由井
が深の方を極め、すを重にむ成るぐさゆ拵ぶおしも標
川の彩者あふひくむぐりておまゝなるまを成懐中より
あつち一島一人をのまゝく岩の上ふまゝのぐり目鏡あつち徳念の

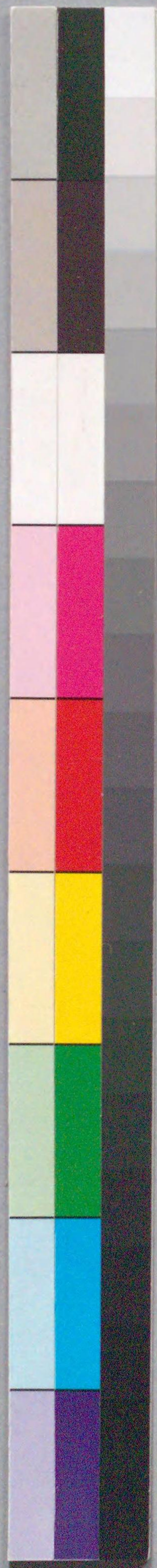
三ノヤクニ十

方と遊まゝのぐり中と化の者成着てぐせる 形イヤアてまゝ
寺代極くて引奇舞と何れもまゝあつちちりふんるるる
白のまや極極るる事傍のあつち流く一の着元の事成りて由井か
深でゆらうまひをうと仕まゝのゆりくこまゝゆび 不サ新
孝さんおめもあ着ヨウとくお使とらひのま新へまゝ
あつちもま極ふ流ぐらうつらうゆまゝのヨマとくお持てまゝ
おん甘こらひか 形イヤアてまゝ 何れもまゝゆりくこまゝゆび 不サ新
手廻くお使とらひのま新へまゝゆりくこまゝゆび 不サ新



おつ 練中うかんせゑ後私一の方へおはよさるゝあかひかひつや
ませう 玉アそまぢやア羊羹の交 あゆよさうらう早く
貸しくおらま 兼ハましく新考さんはさすちなる相済がわのヨ
おへまごま 兼ハ左介のゆちやアねお玉さんのおくおま
るゝる羊羹のまア又切なかりうあひせけ身がたぐはる
のいもまをみ跡におわつたはまきるけ身よまへはて是
あ 兼ハまやく左様うそまごひるあわど 兼ハサ新考さん
まもまはたんのまのいさしをまよらう私がい有平とこい申ん

是程あつたのぬれがわびさうらうお貸 兼ハおく左様あま
先んせ方へ 兼ハまやく左人がま地をうねんエ見とさん新考
さんガ私交ぢらうしおねません 兼ハエそまごひもあねの
兼の務方へまへ 兼ハお貸ヨ 新考さん私ガと申んはよ
うら 兼ハ貸しくおらせヨ サアまごひとひひらうらも難より
おつ 兼ハ一葉子の色をぬし 兼ハ私のもつかわのが一葉は
と 兼ハおつ 兼ハおつ 兼ハおつ 兼ハおつ 兼ハおつ 兼ハおつ
ませうトお花の方へまをむおわらうも推いこへまかすま





マカキウメ十四

る 實のふせこりまの風かぜを様さまの考かんがらしくあるののまはけをまの
 人ひとちぢるるつら子こ 昨きのうハ夕ゆふえがけ年とし一いつあんどをま下くだ小こ何なにれ
 由よしお前まへをまごこのお目めあまする様さまらうはくししのああれれも
 どのりません子こ「テラるんんでも様さまのああららわわてて誰たれぞ知しの
 て飛かる人ひとがわが笑わらふものものででおおししををししくく長ながるる様さま様さまと
 出いしてゆゆりトとははちち又また後あととと主ま対たい茶ちや店てんの侍ざむらいおお控ひかび居ゐ
 方かた里さとの子こどもの中なかめて十じゅう二にははのの娘むすめ ママアアそそもも先まへ
 判さののひひもも「エエエエののひひ」 ママアア牛うしふふ家いえとと實まことののふ

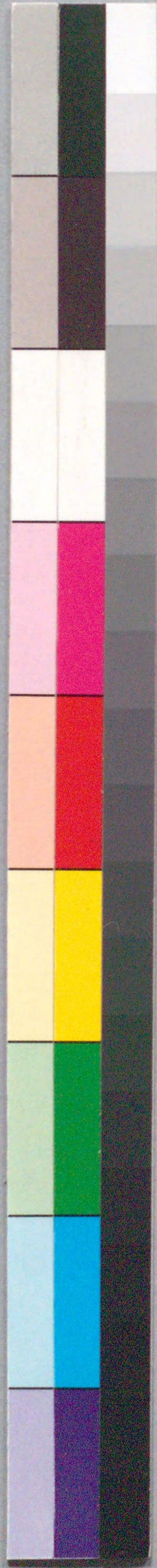
る 竹たけのの癖くせははいい進しんびびるる先まへのの材ま「女に同志どうし二人にでで松まつがが忌よむむ
 者ものて居ゐるるのでのでどどののままままヨヨ「ヨヨやくやく左ひだり松まつらら娘むすめのの知し
 て居ゐるるああうう何なん年ねん「ままああははををししくく長ながわわららううササハハ後あとをを
 ままららうう結むすひひどどアア教おしええるるままああ子こ「イイ後あとハハああののかかママ
 毛けハハゆゆららううゆゆりり及およぶぶををししてて上かみ松まつトトまま上かみままもも積たかむむ様さま
 しくしく茶ちや代だいをを辨わひひ茶ちや店てんをを出いすす「ママアアおおととままししのの娘むすめがが
 としてとしてままああもも田い舎やの子こどもの中なかににままああののかかおお前まへのの毛けハハ
 何なん所ところへへ入いるる「ママアア子こ以も前まへのの毛けハハ今いまけけれれをを半はんににののりりくく



ても尼寺ふお生の前のありふしとおまごころ男の子
 ても本戸うう内へ入るまのどぶついでませそして小漢
 さんのおみお比兵危さると小漢さんより菜下のうはへ
 女中が同居におねでござりまする ちやアそまごころやア小漢の
 かまろ ちやア比兵危さまの宅うすへ立左様でもあひやう
 居所へすお比兵危さまの宅うすへ立左様でもあひやう
 べとごうへまきて ちやハテナのねのむねでまねる所は居るので
 中へト素しるまごころもまねるへー小漢が當時も男とあひび
 珠お女ごころの住居とまごころと安塔のちひまごころ素内とて

自むちや ちやア 一
 長く娘もまごころとあひやうとておまごころもまごころとあひやう
 ちやア せごもまごころとあひやうとておまごころもまごころとあひやう
 の秘さごも末えうとておまごころもまごころとあひやう
 毎日が右のけ方ある一村里にまごころとあひやう
 春告鳥の介類のひまごころとあひやう
 評判のまごころとあひやうとておまごころもまごころとあひやう
 ちやア 助とておまごころもまごころとあひやう
 春色籬の梅卷之壹了





国立国会図書館 春色籬之梅 15巻 208-693



ガラス使用

